政治行政学科で過ごした短い歳月

我　部　政　男

山梨学院大学の紀要に文章を書くことは、おそらくこれが最後になるかもしれない。そう思い感じることは、単なる感傷ではなく、17年間の思いの深さにある。この機会に、はっきりと述べておかなければならない大切なことがある。それは、山梨学院大学に教職の席を与え採用してくれた、学長・理事長の古屋忠彦氏及び法人本部長の三神廣俊氏に感謝とお礼の言葉を申し上げたいことである。これまでにもそのことをお伝えするチャンスはあったが、次の機会にと思い、延び延びになり、言いそびれてきた。思うに、教職を得た山梨学院大学での研究・教育の生活は、私の人生の後半の中で、最も充実した時期である。このような研究環境を与えてくれたことに、まずは、心からのお礼を申し上げたい。

さてこの度、私に一文を求めたのは、紀要『法学論集』の編集委員会のようであるが、実際に連絡をしてくれたのは、日本の地方政府・地方自治の発展に情熱を傾け、全国を踏破し精力的に取り組んでいる江藤俊昭教授からである。

確か初めの学科の名称は、法学部・行政学科で、数年後に政治行政学科になったような気がする。当初の提出した書類では、政治行政学科であったが、文部省は、行政学科の名称に固執したようである。誰からともなく後で聞いた話であるが。

定年後、十数年も過ぎると、記憶が不鮮明になるのは、人には多少の差はあれ、老人特有のごく自然なことかもしれない。老齢化の記憶への影響

は、避けられない現象であろう。とは言え、不確実なことを書いてもいということにはならない。

定年後、私は郷里の沖縄の本部（もとぶ）に帰ってきた。広くもない小さい沖縄だが、我が郷里の本部は、紺碧の空を反映した海もあり低い山もある。夕日に映える伊江島や、瀬底島、水納島のしまなみの景色もいい。破壊された自然環境の多い中で、比較的自然なままの状況が残されている。南国では、暑い夏が長い。冬も暖かく、寒い雪の降ることはない。自然の中での緩慢な生活は、刺激も少ないが、取り立てて不満も新しい要求もない。諦めた悟りの境地にほぼ近いのかと考えたりする。

はじめて教職に就いたのは、琉球大学である。そこでの生活が20年も過ぎたころ、変わったところで働きたいと思うようになり、山梨学院大学に来ることになった。実に不思議な因縁である。法学部に行政学科ができた年にあたる。当然のことながら、学問的な希望と意欲に満ちた新任の教授、助教授が集められた。

従来、大学の法学部ではでは、法学科と政治学科が併設されている場合が少なくない。単独の政治学部を設置しているところは、ごくまれである。そのこともあって、行政学科の新設は、政治学・行政学を基礎にした社会変革の意味でも期待されていた。地方自治の展望を切り拓く人材を育成し、社会に送り出す斬新な施設の学科として、地域社会からも期待されていた。

その重責を担った当時の著名な教授が、河中二講教授である。河中教授の基本構想のもとに教員人事は推進された。個性的な教授も揃い、講義内容も充実していたはずであるが、卒業生の就職分野は、自由に解放されていたわけでもなかった。第一の関門が、たちはばかった。おおよそ予想されてはいたが、採用試験を無事にパスすることは高いハードルであった。全国の大学から受験する国や地方自治体の行政を担う公務員試験に受かることは、並大抵のことではなかった。努力すれば自ずと道が開かれるとい

う精神主義で乗り越えられる壁にも例えられた。伝統のある大学の占めている公務員分野への進出は、山梨学院にとって、理想を掲げるだけでは乗り越えることのできる分野ではなかった。しかし、限られた少人数ではあったが、その固い障壁を乗り越えた学生もいたことも事実である。県庁や地方自治体の市町村の職員になったのもいた。行政学科以外の学生からも、警察や消防関係の公務員となり、就職したのは、相当な数になるはずである。その他に、教育の学校分野、銀行、病院事務をはじめ、民間会社に職を得たのも多い。社会全体の基本分野を支える強い柱となっている卒業生の活躍を考えると、広い意味では、行政学科設立の基本構想は、生かされ成功したともいえる。また、これとは異なり、私とは、別の見方もあるかもしれない。

ところで、私の担当科目は、日本政治史、地方政治論で、いくらか地方政治にも関係したが、直接的には、地方行政と緊密に交わる側面は少なかったように思えた。学科全体として、重点的に取り組んだのは、学習指導と交流をゼミ中心の学生とどのように作り出すかということであった。

個性的な教授の講義であり、ゼミであるだけに、それぞれのやり方で、大きく成果を上げてきたはずである。

卒業する時に学生は、卒業論文を提出することを義務づけられていた。学生にとっても重い負担であったろうと思う。正直なところ、論文指導は、私個人にとっても、扱う範囲が広く多事にわたるため極めて困難な作業であった。専門の政治史の分野であれば何とか、助言もし、指導もできたはずであるが、中には、正直な話、内容的に論述を理解しえないのもあった。仮に無断引用の個所があったにしても、部分的にはそれを見抜くだけの力もなかった。

卒業論文のテーマや題は、学生が自発的に決めるので、それは尊重されなくてはならない。文章の指導は、それなりに意味の通じるように言うこ

とはできる。

他の人の文章を引用する時は、かぎカッコ（「　」）を付して明確にすることを強調しておいた。論文指導という面では、満足のいく教育がなされなかったことも事実であり、学生にも不満が残ったことであろうと想像する。今更反省してもしようもないが、申し訳ない気持ちは強く残る。

卒業論文の制度に関しては、様々な見解があるはずである。無理に書かせるよりは、廃止した方がいいという意見もあろう。論文の質や内容の程度にもよるが、青春のエネルーギの燃焼の残像として、意義があると認めるならば、制度を残しておいてもいいのであろう。

ゼミで親しくなった学生の中には、その後に私の住まいの沖縄にまで訪ねて来てくれたのもいる。中には結婚式に出て、スピーチを頼むのもいる。当の学生のはっきりとした記憶がなくとも、ご両親の手前、いい論文を書いていたことを伝え、学生時代の師を結婚式に呼び寄せる政治力のあることは、まさしく大学での政治学学習の結果であると、式場に参加した皆さん、友人たちの前でつけ加えておいた。ゼミ生の結婚式に出ることは、単に式に同席するだけでなく、参加者の中に多くの他のゼミ生にも再会の機会ともなり、卒業後の成長・発展の歩みをも知ることにつながる。

「卒業論文集」（峡年報）の中から、論文執筆の題名を拾い上げてみると実にさまざまで多様性に富んでいる。限られた例を挙げてみるにとどめるが、戦争責任、日米安全保障条約、象徴天皇制、沖縄返還と核撤去、教育改革、オリンピックの歴史、戦後日本の警察制度、東京裁判、戦後改革、日本の自動車産業、薬害エイズ事件、従軍慰安婦、いじめ問題、戊辰戦争、日中関係史、言論の自由、吉田松陰、戦争と広島、西郷隆盛、沖縄の米軍基地、731部隊、日本国憲法の成立などとなっている。幅広く複雑で困難な課題に取り組む情熱を示している。学生時にこのようなテーマに関心を持った事実は、忙しい現実社会の中でも永く忘れることはないであろう。

持続する志を感じる。

数年前、何年ぶりかに上海、天津、北京を訪問した。山梨学院で学び中国に帰国した卒業生が集まり、歓迎の宴を開いてくれた。元気で活躍している誠実な姿に接し、ある感動を覚えた。

先輩、同僚教授から学ばせていただいたことは、多い。東大法学部出身の小山博也教授からは、私が深い関心を抱いていた矢内原忠雄、岡義武、丸山眞男の人柄について教えてくれた。小野寺規夫教授からは、厳粛な判決文の中核に秘められた深層のあることを教えられた。広く長い歴史の中国社会の政治と社会を理解するのは、容易なことではないが、熊達雲教授の適切は忠告と共に旅をして経験で情報を得、中国に対する理解をいくらかは深めることができた。日露戦争100周年の記念行事とロシアの日本学者ニコライ・ネフスキーを訪ねてのロシアの旅では、サルキソフ教授に全面的にお世話になった。ソ連、ロシアに関心を持ちながらも知る機会は少なかった。実際にロシアの土を踏むことができたのは、サルキソフ教授の努力に負っている。

非常勤講師の体験は、研究領域の近い研究者との情報交流の意義もあるが、圧倒的な蔵書量を誇る都内の早稲田、慶応、法政の大学図書館の利用ができて大いに助かった。

研究費は、科学研究費補助金の交付を受けて、海外調査旅行ができたことは幸いであった。関係資料も集めることができた。また、収集した資料のいくらかは出版物として発行することもできた。

全体的にみて、すべてが、順風満帆とまではいかないが、政治行政学科での17年の短い歳月は、私個人にとって実り多き充実した時間が過ごせたような気がする。

（2020年10月10日記）